平成３０年１１月１４日

・　がん対策のススメ２０１８

Ｄｒ．中川のがん通信Ｖｏｌ．４

［日本人に減っているがん、増えているがん］

出所：がん対策推進企業アクション事務局

“がん”を知り、“がん”と向き合い、“がん対策”に前向きになるために

がん対策のススメ 2018

Dr.中川のがん通信 vol.4

今年も行こう
がん検診
社員とその家族のために
会社が始めるがん対策

日本は2人に1人が“がん”になり、3人に1人が“がん”で亡くなる世界トップクラスのがん大国です。
がんの6割が治る今、がんを抱えながら働く人も増えています。
これから一緒に、がんについて学んでいきましょう！
ぜひ、あなたの大事なご家族や、職場のみなさんと読んでみてください。

【日本人に減っているがん、増えているがん】

かつて、日本で最も多いがんは胃がんでした。たとえば、私が生まれた1960年では、男性のがん死亡の半分以上が胃がんによるものでした。しかし、高齢化の要素を加味した「年齢調整死亡率」では、胃がんは過去10年で3割も減少しています。

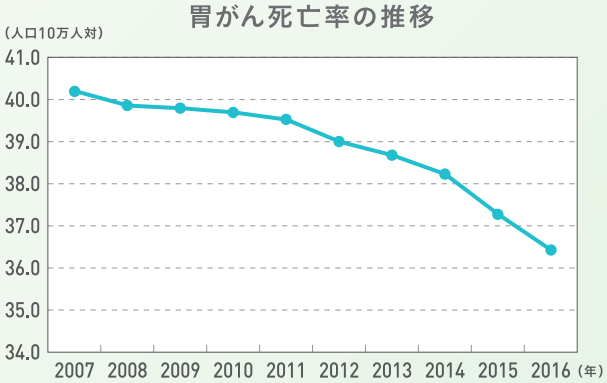
胃がんの原因の98％程度が乳幼児期のピロリ菌の感染です。ピロリ菌は、免疫力が完成しない乳幼児期に、不衛生な飲み水や食べ物などから感染し、胃の粘膜に住み着きます。このピロリ菌の感染が、胃粘膜に慢性の炎症を引き起こし、胃潰瘍や十二指腸潰瘍、さらに、胃がんの原因になります。

胃液は、金属も溶かしてしまうほどのpH1～2の強酸性ですから、ふつうの細菌は生きていけません。しかし、ピロリ菌が分泌する「ウレアーゼ」という酵素は、胃の中の尿素を分解してアルカリ性のアンモニアを作ります。このアンモニアが胃酸を中和することで、ピロリ菌は胃の中で生きていけるのですが、これによる炎症が胃潰瘍や胃がんにつながるわけです。

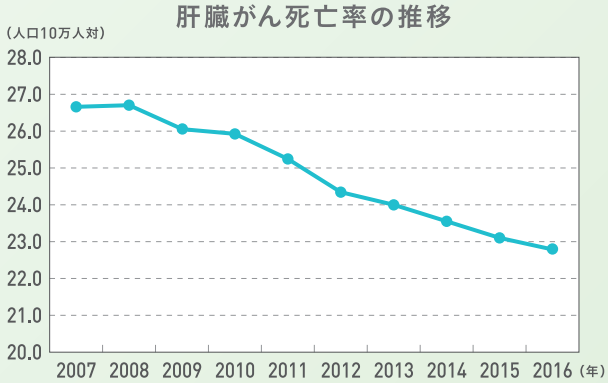
ピロリ菌は日本最大の感染症で、日本人の約半数が感染しています。とくに、衛生環境が悪い時代に幼い時期を過ごした60歳以上では8割近くが感染しているといわれます。一方、冷蔵庫の普及などで食品の衛生化が進んだ10歳以下では感染率は1割以下に減っていますから、胃がんも減っていきます。アメリカでは胃がんは、白血病や膵臓がんよりめずらしい「希少がん」になっていますが、1940年代にはがんのトップでした。日本よりずっと早く衛生環境がよくなったことで劇的に減ったのです。

胃がん以上に減っているがんが肝臓がんです。肝臓がんも「感染型」のがんで、原因の8～9割がC型、B型の肝炎ウイルスによるものです。肝炎ウイルスのほとんどが輸血によって感染していましたが、現在は血液から除去していますから、年齢調整死亡率はこの10年で半分にまで減っています。

胃がん死亡率の推移



肝臓がん死亡率の推移



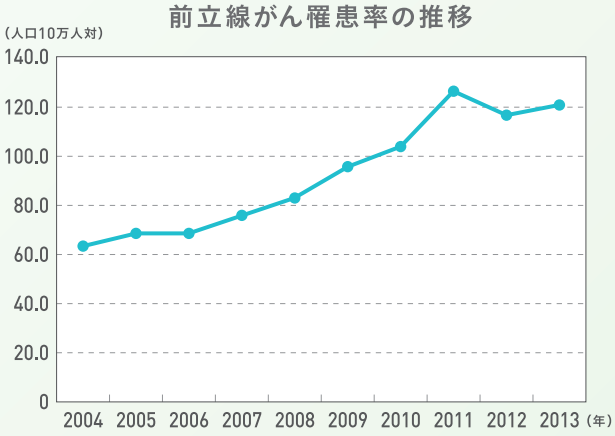
出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」2016がん統計

逆に急増しているがんの代表は、男性では前立腺がん、女性では乳がんです。今や罹患数でトップになった大腸がんとともに、「欧米型」のがんの代表です。

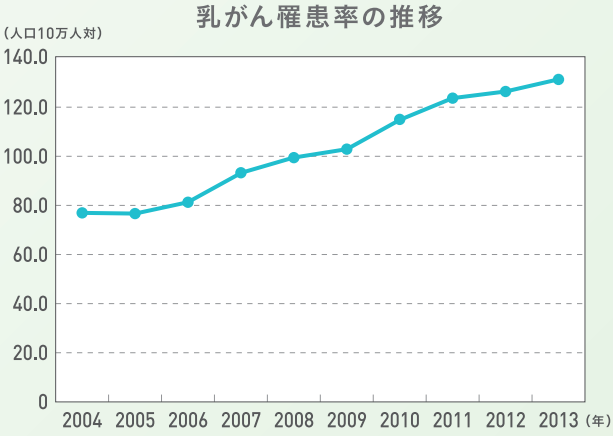
前立腺がん、乳がんはそれぞれ男性ホルモン、女性ホルモンの刺激で増殖します。そして、性ホルモンはコレステロールを原材料として精巣、卵巣で合成しますから、動物性脂肪の摂取が増えたことが背景にあると思います。ただ、動物性脂肪以上に乳がんを増やしている要因は少子化です。妊娠・出産、授乳中は生理が止まるなどホルモン環境が変化し、乳がんのリスクが減ります。出生率の低下は乳がんを増やす大きな原因となるのです。

昔は子供を10人も産むお母さんもめずらしくありませんでした。妊娠～授乳の時期は2年以上も生理が止まりますから、そんなお母さんの場合、20年以上も乳がんのリスクは低下します。今は、一人もお子さんを持たない女性が増えていますが、栄養状態の改善で、初潮が早まり、閉経が遅くなっていますから、永い間乳がんのリスクに曝されることになります。実際、47都道府県のなかで乳がんの患者が最も多いのは、出生率が一番低い東京です。

前立線がん罹患率の推移



乳がん罹患率の推移



出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」2013がん統計

中川 恵一（がん対策推進企業アクション アドバイザリーボード議長）

東京大学医学部附属病院 放射線科准教授、厚生労働省 がん等における緩和ケアの更なる推進に関する検討会委員、文部科学省「がん教育」の在り方に関する検討会委員

東京大学医学部医学科卒業後、東京大学医学部放射線医学教室専任講師、などを経て、現職。緩和ケア診療部長、放射線治療部門長を歴任。著作には「がんのひみつ」などがんに関する著書多数。日本経済新聞でコラム「がん社会を診る」を連載中。